
日本図書館文化史研究会

ニューズレター

第 92 号 2005 年 5 月 29 日

日本図書館文化史研究会

〒101-8301 千代田区神田駿河台 1-1
明治大学司書・司書教諭課程
郵便振替口座 00170-5-164973

(事務局)

小黒浩司

ファックス

電子メール oguro@sakushin-u.ac.jp

■■ 目 次 ■■

図書館と文化史と研究会 (阪田蓉子)	2
2005-2007 年度の運営体制	
日本図書館文化史研究会 2005 年度第 1 回研究例会のご案内	4
日本図書館文化史研究会 2005 年度研究集会・総会のご案内	5
藤野幸雄先生からのご寄附について	7
創立 25 周年記念「図書館人物伝 (仮称)」原稿募集について	8
『図書館文化史研究』第 23 号原稿募集のお知らせ	
図書館文化史研究 文献紹介 ジョアン・E・パセット著 宮崎真紀子・田口瑛子訳『アメリカ西部の女性図書館員：文化の十字軍、1900-1917 年』(深井耀子)	9
2004 年度第 3 回例会報告	11
運営委員会通信	13
事務局だより	14

会費納入のお願い
会員動向

図書館と文化史と研究会

阪田 蓉子(明治大学)

先ごろ、「ロートレックとモンマルトル」展を見る機会がありました。実は、会場に着くまでうかつにも知らなかったのですが、展示されていたポスター作品は、フランス国立図書館所蔵(BnF)のものでした。日本でも、美術系の大学図書館がポスター類を所蔵していることは知っていましたが、ロートレックのポスター作品が、BnFの所蔵とはちょっと思いがけないことでした。

資料や作品がさまざまな成り行きから、偶然図書館に入ったり、あるいは博物館の所蔵になったりすることがあるでしょう。その経緯はともかくとして、所蔵が図書館であれ、美術館であれ、あるいは博物館であれ、文化遺産をしかるべきところで保存し、人々に提供し、次の世代に引き継いでゆくことが重要であると再認識しました。

この展覧会では、ロートレックが影響を受けたという浮世絵も展示されていました。そのこともあって、資料や作品を所蔵している類縁機関間の横のつながりの大切さについて、あらためて考えさせられました。図書館が所蔵する資料や情報と博物館、美術館が所蔵する作品群との関連づけによる展示、作家や作品と同時代の他の資料や作品が比較できる展示、あるいは関連する作品や作家の時系列による流れなど、様々な視点、角度からの関連づけが可能であり、そのことによって、資料や作品の意義や観点の面白さが深まり、資料や情報を提供する際に、より効果をあげるのではないかとということです。

さて、わたしどもの研究会は1982年に「図書館史研究会」として発足し1995年に「日本図書館文化史研究会」と、会の名称をあらためました。図書館文化史という名称によって、みなさまがたはどのような会の活動を思い浮かべられるでしょうか。図書館の歴史および図書館に関わる文化史について研究し、報告し、また語りあう会、私もそのように考えています。さらに思いを深めてみますと、図書館に関わる文化の歴史という言葉はかなり広い意味を持っています。「文化」と「歴史」、「記録(されたもの)」あるいは「図書館」がキーワードとなると、いかに広がるか。直接図書館と関わりがなくても人間のいとなみとその文化を記録したものを図書館が保存し、利用に供することを図書館の使命のひとつだと捉えることもできましょう。とするとフランス国立図書館がロートレックのポスターを所蔵していることも頷けます。

同時に私どもの研究会の名称の意味の深さに少々誇りを感じたのです。

図書館文化史という際、私は図書館の文化史という意味だけではなく、口承から始まり、活字情報である図書を含めた様々のメディアによる情報とそれに関わる文化史を思い浮かべます。そして、紀元前何千年から、人々が創り、遺してきた文化を次世代に引き継ぐ使命を果たさねばならない、図書館はその役

割を担う場所のひとつであると勇み立った思いに駆られるのです。同時に既に失われた多くの遺産に思いを馳せる時、失われたもののうち、大半は自然災害によるものよりも、人の手で破壊されたものの方が遥かに多いのではないだろうかと思われたい。古くはアレキサンドリアに始まり、現代においてもサラエボにおける資料の焼失、バグダッドの国立博物館における美術品の略奪と流出の例など枚挙にいとまがありません。

図書館および図書館の文化史を研究対象とし、調査の対象とするわたしどもが他方で考えねばならないことは、研究・調査対象の保存であり、後世へ遺すことであるとすれば、争いのない世界、平和な世界づくりにゆきつきます。平和なくして、図書、情報そして文化の保存と継承はないと言っても過言ではないと言えましょう。世界のあちこちできな臭いことが日々起きているなかで、図書館と図書館に関わる文化を後世に遺そうということで、思いが一つであることを前提に、本当に小さな団体ではありますが、一粒の辛しの種のように、ぴりりと存在感のある会として、みんなで育てていきたいと思えます。この会の長所の一つは、小規模であるがゆえに、会員同士の顔が見える会であるといえましょう。これまでも編集委員を含む運営委員および事務局長その他大勢の会員みなさまがたの手弁当でなりたってきました。今後も役員の方々をはじめとして会員みなさまがたおひとりびとりのご協力とご支援によって、さらなる歩みを重ね、次代を担う方々へ引き継ぐことができれば…と願っています。

最後に、今年の研究大会は期せずして、明治以来の図書館用品の歴史的変遷とその保存が主要なテーマ（仮）です。文字で残された資料類だけではなく、図書館の文化に関わる様々な用品の保存に目を向けることが必要な時代になりました。ことに近年は、IT化など技術革新の影響を受け、かつて図書館で用いられていた道具や機器類などが廃棄され、今では、図書館で働く人々の大半が知らない図書館用品も多いようです。古い世代の人間が「そうそう、こんなものも使っていましたなあ」と懐古にふけるばかりではなく、中堅・若手の世代にも過去を知っていただき、さらには保存へと目を向けていただきたいと企画しました。みなさま、奮ってご参加くださいますよう、お誘い申しあげます。

2005-2007 年度の運営体制

○ 代表

阪田蓉子

○ 運営委員（五十音順）

石川敬史（研究）、泉山靖人（広報）、深井耀子（関西地区）、大沼宜規（『ニューズレター』編集）、奥泉和久（機関誌『図書館文化史研究』編集）、小黒浩司（事務局）、中林隆明（機関誌『図書館文化史研究』編集）、三浦太郎（機関誌『図書館文化史研究』編集）、山口源治郎（監査）、山本順一（監査）

日本図書館文化史研究会

2005 年度第 1 回研究例会のご案内

2005 年度第 1 回研究例会を、下記のように開催します。

今回の研究例会は、大倉精神文化研究所の見学会としました。このため参加申込方法などが従来の研究例会と異なりますので、ご注意ください。

本研究会の 2005 年度研究集会では、「図書館用品 その保存と活用」をテーマにシンポジウムを開催します。その前段として、歴史的図書館用品の宝庫ともいえる同研究所の見学を企画しました。多くの方の参加を期待します。

記

- 日 時 7 月 2 日 (土) 14 時～16 時
- 場 所 大倉精神文化研究所
- 交 通 東急・東横線「大倉山」駅下車
 - ※ 大倉山は、特急・急行は停車しません。渋谷方面からの場合、武蔵小杉で、横浜方面からの場合、菊名で各駅停車に乗り換えてください。
- 参加費 500 円
- 申込方法 事前申込制とします。当日参加はご遠慮ください。
 参加ご希望の方は、本研究会事務局へ、葉書、ファックス、または電子メールでお申し込みください。
- 申込締切 6 月 23 日 (必着) でお願ひします。
- 集合場所 「大倉山」駅改札口に、13 時 40 分にご集合ください。
 - ※ 駅から研究所までは徒歩で 10 分程ですが、途中かなり急な上り坂になっています。
- 内 容
 - 大倉精神文化研究所について
 同研究所は、「東西両洋における精神文化の科学的研究を行い、知性並びに道義の高揚を図り、公民生活の向上充実に資し、もって世界文化の進展に貢献する」ことを目的として、大倉邦彦 (1882-1971) によって、1932 年に設立されました。現在の横浜市大倉山記念館は、同研究所の本館として 1932 年に竣工したもので、長野宇平治設計のプレヘレニック様式 (または帝冠様式) と呼ばれる独特の建築物で、横浜市の文化財に指定されています。
 - 大倉精神文化研究所図書館について
 同図書館は、蔵書数約 9 万冊の「精神文化」の専門図書館で、内部の図書館用品類は、歴史的に非常に貴重なものが残されています。例えば、米国ライブラリー・ビューロー製の鋼鉄製積層書架や間宮商店製の目録カードなどです。

日本図書館文化史研究会

2005 年度研究集会・総会のご案内

2005 年度日本図書館文化史研究会研究集会・総会を、おおむね下記のように開催することになりました。

今年度の研究集会では、「図書館用品 その保存と活用」と題したシンポジウムを、日本図書館協会と共同で開催します。多くの方の参加を期待します。

なお、内容等の詳細については、次号のニューズレターで、お知らせします。

記

- 日 程 : 2005 年 9 月 17 日 (土)・18 日 (日)
- 会 場 : 日本図書館協会会館
- 交 通 : 営団地下鉄東西線・日比谷線茅場町駅下車徒歩 5 分
東京駅下車徒歩 20 分
※ 会場・交通案内の地図は 7 ページに掲載しました。
また、次の URL をご参照ください。
<http://www.jla.or.jp/kaikan.htm>
- 開催方法 : 日本図書館協会との共同開催
- 参加費 : 1,500 円
懇親会参加費 5,000 円
2 日目の昼食弁当 (事前予約制) 1,050 円
- 申込方法 : 次の事項を明記して、下記まで電子メール、ファックス、または葉書でお申し込みください。
 - ✓ 氏名 (ふりがな)
 - ✓ 所属
 - ✓ 懇親会参加の有無
 - ✓ 2 日目の昼食弁当の予約希望
- 申 込 先 : 〒321-3295 宇都宮市竹下町 908
作新学院大学 司書・司書教諭課程
小黒 浩司
電子メール : oguro@sakushin-u.ac.jp
ファックス :
- 申込締切 : 2005 年 8 月 31 日 (必着)
- プログラム

第1日 : 9月17日(土)

シンポジウム

- テーマ : 図書館用品 その保存と活用
- 報告者 : 竹内 愔 (日本図書館協会理事長)
木原 祐輔 (キハラ株式会社代表取締役)
小川 徹 (日本図書館文化史研究会前代表)
- 司会 : 中林 孝明 (東洋英和女学院大学教授)

12:30- 受付開始

13:00-13:30 CIE映画『格子なき図書館』上映会

13:30-13:40 挨拶

13:40-14:10 報告① 竹内 愔 図書館用品の標準化

14:10-14:40 報告② 木原 祐輔 歴史的図書館用品の現状

14:40-15:10 報告③ 小川 徹 図書館用品の普及

15:10-15:30 休憩

15:30-17:00 全体討論

17:30-20:00 懇親会 (参加費 5,000 円)

会場 : シェルブール

日本図書館協会会館より徒歩5分、ホテルユニバース地下1階(地下鉄茅場町駅前)

第2日 : 9月18日(日)

10:00-11:00 個人発表①

11:00-12:00 個人発表②

12:00-13:00 昼食

13:00-14:00 個人発表③

14:00-15:00 個人発表④

15:15-16:15 会員総会

16:15-17:00 運営委員会

※ 第2日の昼食について

会場近辺の食堂等は日曜休業が多いため、弁当の予約販売を実施します(1,050円)。

※ 宿泊の斡旋について

宿泊の斡旋は行いませんので、各自ご手配ください。

会場案内

藤野幸雄先生からのご寄附について

2005年3月、名誉会員の藤野幸雄先生より本研究会に対して多額のご寄付を頂戴しました。

運営委員会で協議の結果、藤野先生のご厚意に甘え、ご寄附をありがたく頂戴し、次のように取り扱わせていただくことにしました。

- ご寄附については、一般会計に繰り入れず、別会計を立てる。
- ご寄附については、新規の口座を開設して当面そこに預け入れ、使途等を運営委員会で検討し、その結果を会員総会に諮る。

創立 25 周年記念

「図書館人物伝（仮称）」原稿募集について

本研究会は、きたる 2007 年に創立 25 周年を迎えます。本研究会ではこれを記念した諸事業を行うことになりました。

ニューズレター前号で、『図書館文化史研究』第 24 号（2007 年 9 月頃発行予定）を「創立 25 周年記念号」とし、また「図書館人物伝（仮）」を特集テーマとすることをお知らせし、会員の皆様のご投稿を募りましたところ、さっそく以下のような人物を対象としたご応募を頂きました。

「図書館人物伝」へのご投稿を希望される方は、氏名・所属・連絡先（住所、電話、メールアドレス等）・取り上げたい人物を明記して、事務局までお申し出ください。本年末を目処に採録する人物、ならびに執筆者を確定する予定です。

なお、原稿の分量は 400 字詰原稿用紙換算で 50 枚程度、締め切りは 2006 年 12 月末日となります。多数の原稿が集まった場合、単行本での出版も計画しています。奮ってのご応募をお待ちしています。

また、「人物伝」で取り上げるべき人物などにつきまして、会員の皆様からのご提案・ご要望などをお待ちしています。「記念号」に限らず、25 周年事業についてのご意見等も事務局までお寄せください。

○ これまでに寄せられた「人物伝」対象者

今井貫一

岡 千仞

叶沢清介

佐野友三郎

島尾敏雄・伊波普猷・真境名安興

湯浅吉郎

P.O.キーニー

J.H.シェラ

リリアン・スミス

メアリー・レミスト・ティッコム

『図書館文化史研究』第 23 号原稿募集のお知らせ

機関誌『図書館文化史研究』第 23 号の原稿を募集中です。

原稿の締切は 2005 年 12 月末日です。ふるってご投稿ください。

なお、この件に関するお問い合わせ、ならびに原稿の送付先は別記事務局までお願いします。

【図書館文化史研究 文献紹介】

ジョアン・E・パセット著 宮崎真紀子・田口瑛子訳『アメリカ西部の女性図書館員：文化の十字軍、1900-1917年』 京都大学図書館情報学研究会発行 日本図書館協会発売 2004年 233p ISBN4-8204-0327-3 ¥3,500

タイトルにもあるように本書は、20世紀初頭のアメリカ西部女性図書館員という非常に限定された主題を扱っている。では、これは21世紀の日本の図書館という場面にはまったく関係がないであろうか。評者は、図書館と女性というテーマからも、研究手法からも、多くの示唆を得られると考える。

本書は100年前のアメリカ西部という、ある意味ではマッチョ男性の神話的舞台で、引きずるような長いスカートをはいた女性図書館員が——大抵はひとりで——無から有をつくり出すような活躍をしたという物語である。大部分は無名の女性図書館員たちが、実際にどのような人びとで、どのような仕事をし、どう考え感じていたかを描きだしている。たとえば、彼女たちがいかなるバックグラウンドをもっていたかを、さまざまな一次資料を探索して明らかにしている(第2章 西部の図書館員とは誰だったのか)。写真と数表も豊富であるが、巻末の「注および参考資料」からも、「偉人」ではない過去の普通の図書館員を調べ上げるための資料発掘活動にはなみなみならぬ努力が必要であったことがうかがえる。大著『手に負えない改革者』(ウェイン・ウィーガンズ著、川崎良孝・村上加代子訳、京都大学図書館情報学研究会、2004)の巻末資料によれば、メルヴィル・デューイの伝記作成に用いられた未刊行資料リストの個人関連文書中男性が50あるが、女性はただの2つである。これからも、いかに女性、更にはとくに有名ではない女性をつきとめる作業が困難であるかは想像に難くはない。著者は相当長期間かけてこの調査をおこない、独自に西部女性図書館員データベースを作成したようである。1枚の表にもかなりのエネルギーが費やされていることがわかる。

とくに心ひかれるのが、西部に赴任した女性図書館員と東部や中西部の図書館学校教員(多くは女性)との間の往復書簡である。大抵はひとり職場で、コミュニティにも似たような女性の友人を見つけるのが難しいという環境の中で、専門的助言と心のケアの両方の役割をはたしている。多くの図書館学校が(現在までも)卒業生からの手紙をきちんと保管しているという事実にも感銘をうけた。日本ではどうであろうか。ほとんどは教員個人の手元には保存されても、その教員の退職後はどうなるであろうか。図書館学科や司書課程で公的に保管されているという実態があるのなら知りたい。

日本では司書への就職は難関であるが、本書の当時も難しい要素があったようである。そうでなければ辺境の西部まで、いくら西部熱があったとはいえ、若い独身女性が親元を離れて出かけはしなかったであろう。こういった、あえて出かけていった女性たちが西部でどのような活躍をしたかを典型的に物語る

のが「コルト 38 拳銃でガラガラヘビを『ドン』と撃ち」、「馬に乗るメイベル・ウィルキンソン」の写真（p.109）であり、「図書館はいらない」という人びとを説得してまわる「図書館組織者」のバーサ・クリムの「.....長靴と合羽を送るよう電報をうつことを考えた。そして夜になるとボートも頼もうと決心した」（p.113）、「私は皆さんが家庭の快適さを楽しむのがわかります.....そして私はスカートを引きずって人びとをインタビューして回っています——しかし、私はとても楽しいのです」（p.120）という言葉である。M・デューイは”Women in Libraries”の中で女性の欠点の1つとして一般的に病弱であることをあげている。そして女性の賃金が安い理由として「シルクよりコーデュロイの方が丈夫だ」ともいうのである。西部に行った女性図書館員たちは、こういった当時のステレオタイプを覆すものである。「私たちはだれか強健な人を望んでいる——必要なときには困難な仕事をやるのが可能で、喜んでやってのけるような。.....資金はあまり十分ではない。.....月給は 75 ドル.....」（p.121）という募集があった。丈夫なだけではなく、薄給で雇える女性が「求められる図書館員」だったのである。これが現在でも「民間活力を生かした多様な形態」という図書館経営の根幹にあるのだろうか。

デューイたちの吹き込んだ「図書館精神」にあふれ、本と読者を結びつけたいとがむしゃらに働いたパイオニア世代が消えてゆくと、あとには立派な図書館システムが残り、男性館長が引継いだ。次世代の女性図書館員たちは徐々に仕事と賃金に不満をもつようになり、「官僚機構の梯子段の下段を占め」（p.177）ようになっていった。なぜパイオニア女性図書館員の献身と業績が次世代女性にうまく引継がれなかったのか。本書の主要なテーマを越えるが、この点に関しては著者の結論はやや明快さを欠くのが残念である。

パセットは定評のある研究者で、とくにフェミニストの図書館研究者から注目され期待されてきていた。従来「女の研究」ということで軽く見られがちであった分野を、批判を許さない研究手法で切り開いてきた。彼女は現在は図書館情報学分野を離れアメリカ史、とくに女性史の教員／研究者である。図書館情報学分野で図書館史が重要科目とは見なされなくなってきていることも、彼女が転進した理由の1つと聞いている。このように我々の分野から優秀な研究者が去っていくことは非常に残念である。

時間と地理をこえて、図書館と図書館員の問題を考えさせ、また図書館史研究の王道の1つを示してくれる本書は、現在の日本の図書館界にも十分光をあててくれるものと思う。

さいごに本書は翻訳書としても高水準であることを強調しておきたい。すなわち訳者は二人とも著者が所属するインディアナ大学でまなび（MLS）、翻訳にあたって直接に教示をあおいでいる。稀有のめぐりあわせといえよう。日本に数ある翻訳のなかでもとりわけ優れた1冊である。ぜひとも図書館蔵書に加えていただくように推薦したい。

深井耀子（梶山女学園大学）

2004 年度第 3 回研究例会報告

実施日：2005 年 3 月 12 日

会場：明治大学司書・司書教諭課程室

3 月 12 日、2004 年度第 3 回の研究例会が、明治大学アカデミーコモン 8 階の司書・司書教諭課程室を会場に開催されました。参加者は 14 名でした。

【発表 1】

○ 発表者

小黒 浩司（作新学院大学）

○ 発表題名

満鉄児童読物研究会の活動

○ 発表要旨

南満洲鉄道株式会社(満鉄)は沿線附属地で多種多様な学校を経営していた。本発表で取り上げた満鉄児童読物研究会は、それら満鉄経営諸学校のなかの、小学校の読書指導・学校図書館担当者の研修組織である。

本発表では、この児童読物研究会の活動のうち、新刊・既刊の児童図書の推薦、学校図書館運営指針「児童図書室経営の理論と実際」の作成、この指針に基づいた学校図書館経営の実践と検証の記録「児童図書室経営の実際」の作成などを紹介した。

満鉄児童読物研究会は 1934 年 4 月から 1937 年 12 月までと短く、また資料発掘が十分でないためその活動の全体像解明に至っていないが、同時期の日本における学校図書館の活動状況からみて看過できない存在であると思われる。

【発表 2】

○ 発表者

塚原 博（実践女子大学）

○ 発表題名

児童図書館における科学あそびの歩み－1960 年代後期以後の発展段階の区分の試み－

○ 発表要旨

発表は、3 部構成である。まず、児童図書館における科学あそびの定義を示し、次に、児童図書館での科学あそび発展のための 5 要素として、a 科学あそ

びの開発、b 科学あそびの本と科学あそびの手引書、研究書などの出版、c 科学あそびの担い手、d 科学あそびの実施環境(科学あそびが行われる建物や設備)、e 科学あそびについての研修を挙げ、各々の発展段階の内容を述べた。更に、図書館における科学あそびの発展段階の区分の試みとして、2つの観点から各々の区分を示した。1つは、図書館組織形態から見た3区分で、第1段階：子ども文庫、子ども科学クラブなどでの実施－1960年代後期から－、第2段階：個別の児童図書館での実施－1973年から－、第3段階：同一図書館システムでの複数図書館での実施－1970年代末期から1980年代－とし、未だ科学あそびや科学あそびについてのまとめ役としての責任者なり担当者がいるという状態までには到っていない変則的な段階にとらえるのが妥当であろうと指摘した。もう1つは、普及の側面からの区分で、第1段階：子どもと科学の本を結びつける方法として科学あそびを考案した時期－1969年頃から－、第2段階：子ども文庫での科学あそびの導入期－1969年から－、第3段階：個別の児童図書館での科学あそびの導入期－1973年から－、第4段階：児童図書館でのその後の普及期(県レベルの研修会などでの科学あそびの研修を契機に普及)－1978年から－とし、現在、科学あそび実施館は、全体の図書館数からみるとまだまだ少ないが漸次少しづつ普及しつつあると結論づけた。

参考文献

1. 市川美代子「科学あそび」『年報こどもの図書館 1997－2001: 2002年版』児童図書館研究会編 日本図書館協会 2003 p.177-181
2. 科学読物研究会編『科学読物研究会20年史』科学読物研究会 1993 101p.
3. 島沢憲治「昭和53年度児童奉仕新任研修の実施について(通知)」東京都公立図書館児童図書館研究会 1978 B5判 13枚 都内公立図書館長殿[宛] 昭和53年5月4日[付]文書
4. 東京都立日比谷図書館利用サービス課児童資料係[編]『東京都児童サービスアンケート報告(平成9年度調査)』東京都立日比谷図書館利用サービス課児童資料係 1998 p.6-8.
5. 日本図書館協会児童青少年委員会編著『公立図書館児童サービス実態調査報告1999(『日本の図書館1999』付帯調査)』日本図書館協会 2000 p.40, p.48, p.59.
6. 塚原博「子どもの科学の本の歴史－1960年代から1970年代を中心に－」『武蔵野女子大学紀要』Vol.31. 1996. P.265-272.
7. 塚原博「小学校図書館における科学の本に対する動機づけとしての科学あそび」『図書館学会年報』Vol. 42, No, 3 1996 p.150.
8. Tsukahara, Hiroshi. “Science Experiment Programs for Children in Japanese Public Libraries and Bunoos ; From 1960s to 1980s” 『実践女子大学文学部紀要』Vol. 46 2004 p.81-88.

運営委員会通信

■■ 次回運営委員会について ■■

従来運営委員会は、研究例会と同所・同日で開催してきましたが、今回の場合研究例会と同所・同日での開催が困難となりました。このため7月中に別途運営委員会を開催する方向で、現在日程を調整中です。

大変申し訳ありませんが、運営委員会へのご参加を希望される方には、日程が決まり次第ご連絡を差し上げますので、事務局までお問い合わせください。または別記事務局まで郵便、ファックス、電子メールで、ご意見、ご希望等をお寄せいただければ、運営委員会で検討いたします。

なお、運営委員会の会場は、明治大学司書・司書課程室を予定しています。次回運営委員会では次のような事項を協議の予定です。

記

- 内 容
1. 2005年度事業計画・予算について
 2. 2005年度第2回研究例会について
 3. 2005年度研究集会・総会について
 4. 25周年記念事業について

ほか

■■ 前回運営委員会の報告 ■■

実施日：2005年3月12日

場所：明治大学

以下のような事項について、協議しました。

1. 藤野幸雄先生からのご寄附について
2. 2004年度第3回研究例会について
3. 2005年度第1回研究例会について
4. 『ニューズレター』第92号について
5. 2005年度研究集会について
6. 25周年記念事業（図書館人物伝）について
7. 次回運営委員会について

事務局だより

■■ 会費納入のお願い ■■

2005年度会費をお納めください。会費は3,000円です。会費を納めていただく方には、封筒に「会費振替用紙在中」の朱印を捺し、振替用紙を同封しました。

■■ 会員動向 ■■

新入会

住所変更

所属変更